



三遊亭竜楽 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。

# 野球談義



田中拓男教授

たなか・たくお 中央大学経済学部教授。1937年生まれ。慶応大学卒。同大学院博士課程修了。『アジア経済の発展経路』などの著書のほか『ちょっと知的にプロ野球』で話題に。前野球部部长。

竜楽 私が学生だったときが大学野球で日本一になったときだったんです。高木豊さんが1年先輩ですから。田中 ぼくはスタンドにおりました。ゼミの学生をみんな引き連れて。竜楽 私もあの日は球場へ行きました。田中 ゼミの子がいちばん前に立って、裸になって応援です。もう恥ずかしくて(笑い)、参りました。竜楽 あの頃(昭和54年春季)が、いちばんピークで、しばらく低迷でしたよね。田中 そうなんです。低迷からなかなか抜け出せないというので、多摩に神宮球場とそっくりそのままの大きさの新しいグラウンドを造って、合宿所も大学のすぐそばにして、野球と学校の生活リズムを作ったんです。ぼくもそのころから野球部にちょっと関係していたのですが、一番変わってきたのが、いまヤクルトに入っている花田君の頃からです。

現在ジャイアンツにいる堀田君が本当にすばらしいキャプテンで、キャプテンシーというのか、リーダーシップというのか、彼が生活をどんなに変えていったようですよ。竜楽 そうですか。やはり大学側がいろいろな意味の環境を整えて、力がついてきたということですね。田中 そうなんです。大学が一生懸命努力してくれたのもあって、学生たちが変わってきたんでしょう。竜楽 私も卒業してから、そんなに注意して見なくなりました。ですから、いいんですけども、ここ数年の成績はどうなんですか。田中 8年間ですか、ずっと二部にいたでしょう。たまに入れ替え戦に出てもだめだったんです。花田君が4年のときに凄くがんばって、ちょうどジャイアンツの阿部君が3年のときかな、とにかく1部に行こうというところで頑張ったんです。面白いもので、1部に上がると更にいい選

手が集まるんです。やはりいい選手が来ると競争も激しくなるから更に強くなる。若い監督に代わって学生たちと年齢が近いものですから、いろいろなかたちでコミュニケーションができて、すばらしいチームワークが生まれたのかも知れません。

## 阿部のキャプテンシー

田中 もちろんありますが、阿部君の場合には、オリンピックに行ったところを見て、それを持って帰ってきてみんなに話をする。そうすると意識も変わっていくし、阿部君のキャプテンシーというのはすばらしい。ただ、阿部君がいるときはよかったですけれど、阿部君がいなくなると、翌年、連敗、連敗で困ってしまっただけ（笑い）。

竜楽 そうですか。

田中 いなくなるとこんなに大変かと言つて、落ち込んでいたのですが、みんな逆を合わせようということになって、秋にまた非常によくなりました。

竜楽 今年はなかなか良かったという話を聞きましたか。

田中 今年の春は、本当に優勝を争つて、惜しいところで少し足りなかった。でも去年の秋だったかな、

新聞記者が、「こんなチーム、初めてだ」と言っていました。

竜楽 どういうことですか。

田中 ある試合で、サヨナラで勝ったんです。そのときにキャプテンが壁に向かって泣いて、まるで甲子園で優勝したようなシーンを見せてもなかったんです。みんな泣いてるの。

というの、キャプテンのエラーで追いつかれてしまった試合だったんです。

竜楽 凄く純粋な野球ですね。

田中 純粋というか、高校生みたい（笑い）。試合が終わったあと、スタンドに挨拶したりするでしょう。普段はスタンドに軽い気持ちで挨拶するけれども、そのときはみんな目が潤んでいて話ができないんです。

大学生がスポーツやるのはこんな純粋なのかと……。

竜楽 とてもいい話です。

田中 野球は単に球を投げたり打ったりするだけではなくて、人情味とでもいうのか、心打たれますね。

竜楽 秋もまた期待が持てそうですね。

田中 そうなればいいですね。もう一人、人情味になります。期待されているのに、スランプに陥ってしまつて打てないレギュラー選手がいて、ベンチに下げられたんです。

それでも一生懸命言葉を出して、みんなを励ましたりしてたら、ある日、すぐ打ったんですよ。それで勝ったんです。

竜楽 ずっと打てなかったのに……ポジションはどこだったんですか。

田中 レフトです。

竜楽 何番を打っていたんですか。

田中 彼は本来三番なんです。そのときは五番でした。それが打つて勝ったんです。監督に聞いたら、彼がいちばん練習すると言っていました。それで新聞記者に、彼があれだけ努力したおかげで勝つたということを書いてあげてくださいよと言つたんです。あれは嬉しかったですね。

竜楽 スランプだったんですね。我々も壘をやつていて、1回受けな

いと、しばらく取り戻せないことがあります。なんかどこか自信がないというか。あるいは高座をちょっと離れたりとだめですね。1つよくなるよ、また調子に乗るんですがね。

田中 大学生だとコーチが付いていないとだめなんですけれども、中大がつらいのは、今まで殆ど専任のコーチがいなかったんです。他



コーチがいると、「いまこうなっている」と言ってくれる。これが必要なんだそうです。

竜楽 プロでもコーチがいるわけですものね。大学生はよけい重要ということになりませんかね。

田中 だからといって、全部「ああやれ」「こうやれ」と言うと全然伸びない。自分で工夫する気がなくなると、ほらほら歩き、そばに行つて、ちよつと見て、ちよつと指摘すると、「ああ、そうか」と理解する。

これが特に重要だと思えます。竜楽 私ぐらいでも若手がけいこに來るんですが、先生がおっしゃるとおり、難しいんです。全部教えたくなっちゃう。でもそうすると、そのまま教わるとおりやっちゃってしまい本当の力がつきません。

田中 イチローは「ああやれ、こうやれ」と教わって、それでうまく

できても面白くないと思っているそふうなんです。言われたことをそのままやったのでは……。落合も独特のバッティングですが、彼はいい選手のバッティングを真似したのではなく、自分に合うバッティングの選手を探して真似したようです。だから、つねに「まず自分があつて」、「自分で考えて」が大切ですね。

### 落合、桑田、清原の年俸数式 チャンス率とピンチ率

竜楽 落合の名前で思い出したのですが、先生は落合の1億円の年俸が妥当かどうかというのをコンピューターで計算したという話を聞いたのですが。

田中 だいぶ前ですが、「ニュースステーション」から桑田と清原の年俸の計算ができないかという依頼があつて、年俸はどうやって決まるか、選手の働きと年俸の関係をいろいろ

調べていったんです。そういう中から、こういう働きの人は年俸がこういうふうになるといふ式を考えました。

ただ、ピッチャーと打者とは違います。打者はだいたいその年の成績で計算します。ピッチャーの場合はいままでの累積で、何勝したかというのをベースにして、その年の成績から年俸計算をやりますから、ちよつと別の式なんです。それでいろいろ計算して、年俸を出したことがあります。それが年俸計算のきつかけです。

竜楽 先生のカツパ・ブックス『ちよつと知的にプロ野球』を拝見させていたいただいて、ピンチ率とチャンス率というのを非常に納得したんです。それによれば、落合はどうでしたか。

田中 これは落語でも同じだと思ふのですが、話の展開には段取りがあつて、ある程度前の話があつて、徐々にいいところに行く。野球はどちらかというと、一発でホームラン

のチームはみんなコーチがいるのに、中大はお金がないものですから、コーチがいなくて監督だけで……。

竜楽 監督1人ですごいエネルギーですね。

田中 それで学生コーチということ、学生が仲間同士でコーチをやっているんです。駅伝もよく話になります。でも、いつもグラウンドに来て、いつも見てもらうと選手は安心するそうです。ちよつとした崩れなどは、本人では分らないんだそうです。

を決めるのではなくて、塁をどんどん埋めていって盛り上げ、ここというときにタイムリーを打っていく。そういうところがぼくの野球観で、

野球の喜びなんです。ジャイアンツが九連覇したときに、阪神とどう違うか、ずっと調べたんですよ。あの

ときの1番、2番、柴田とか土井とかがすごくいい。だからチャンスをつくって行って、王、長嶋がこれを

確実に選す。こんな野球が安定した勝つ野球でしょう。現に、マリナーズがいいのはイチローのおかげです

からね。ジャイアンツが今年いいのも清水が調子いいからです。落合の場合には1億円と言ったけど、トータルということで、チャンスもつく

るし、それからチャンスのときに塁上の走者を選す。同じ4番でも後期の長嶋と落合とどう違うかという

と、長嶋は、ふつうのときはあまり目立たないけれども、チャンスになった

ときにものすごくタイムリーに得点

する。そういうときに働くから強く印象に残るんですよ。ワーツとみんな盛り上がって期待しているときにきちんと決めてくれる。

竜楽 イチローは得点圏打率、極端に高いのではないですか。

田中 高いですね。

竜楽 それは先生、まだ計算していませんか。

田中 ええ。イチローはもちろん高いですが、役割として、やはり1番でものすごくチャンスをつくっていくほうが重要ですね。この野球をやると、チーム全体が安定してくるんですよ。野球の神様とも言えるタイ

カップという人がいたのですが、彼を調べてみると、やはりすごいですね。チャンスを実に拮据していく。みごとです。本来、野球というのは一発

でボンというのではなくて、ベースボールといつてベースをどんどん進めていくことだと思っんです。タイ

カップの記録はおそらく史上最高ぐ

らいでしょう。こう考えていくと落合の1億円は、チャンスを作るのと走者を選すのとあわせてトータルポイントで計算すると1億円になる。

ただ、ぼくが言いたいの、ホームランだけでなく、チャンスをつくる一番、あるいはバントしたりする2番の役割をもっと評価したらどうかということなんです。実はこの評価については「川上さんが言っていたことと同じですね」と出版社の人がびっくりしていました。V9野球、川上

さんはやはり二番の役割とか、そういうのをすごく重視したんです。だから、王、長嶋だけではないんだと

……。 ……。

竜楽 落合が1億円ときは中日でしたか。

田中 中日です。

竜楽 あのと、一、二番はそんなに充実していましたか。

田中 あまりよくなかったですね。

竜楽 そうですよ。

田中 阪神の掛布と同じで、落合がよくても、その前がちゃんとそろっていないと……。だから、記録ではそんなに出てこなくても、前の人の評価を正しくしてくれというのがぼくの本音なんです。ぼくのチャンス率というのは、とにかく打って塁を取ると、盗塁で進むとか、それを全部合わせたもので、平均したら一試合に塁をどの程度取るかという話なんです。

竜楽 大リーグもしくははホームラン主義というか、打点ですと来ていきましたが、去年変わりましたね。

田中 イチローが行って変えましたね。それが嬉しくて。やはり大リーグもホームラン、ホームランって、あれだけ言っていたけれども、イチローが行つてみると、意外に野球はこういうチームが強いんだと証明してくれました。だから、昨年はほとんど負けなぐらいの成績でした。何ごとともそうだと思うんですが、派

手などところだけ見ているけれども、それだけでやっていたら、やはり長持ちしない。阪神が85年に優勝したその5月頃に「いつもの阪神と違う、今年の阪神、優勝しますよ」と言ったことがありました。なぜかと言うと、1番真弓、2番広田、この2人がとにかくチャンスをつくるんです。「これがでてきたから、阪神、勝つ可能性がありますね」と言って、それがスポーツ紙の記事になったら優勝してしまったのでびっくりしたんです。

**竜楽** 先生の本で、大型野球は短命であるというのは非常に納得しました。

**田中** 中大の清水監督ともよくこんな話になったんですが、中大がここまでコンスタントに来ているのは、つなぎの野球ができているからだということです。一人の傑出した選手がいなくても、つなぐ意識を持てば勝てるよね。だからベンチで、とに

かく「つなげ」「つなげ」「つなげ」って、ベンチでみんな懸命に声を出している。すごい盛り上がりですよ、その結果、一挙に大量点を取ることがあるんです。結局、阿部君のときはみんな阿部君に頼り切っていた。だから、いいところまでいくんですけれども、阿部君がいなくなったときにはどうするかといったら、みんなではないでいくしかなかったんです。

**竜楽** 先生は昔から野球がお好きだったんですか。ご出身の和歌山といえば箕島高校がありますか。

**田中** そうですね。小学校のときに野球をやっていて、それ以降、野球はたいへん好きでしたね。本当に好きでした。スポーツ新聞を毎日読んでいたぐらい。中央大学の試合も部長でもないのに、せっせと練習に通って、ずっと見ていたんです。そうしたら、部長に推薦されて。

**竜楽** それはいつごろですか。  
**田中** 部長をやったのは去年です。

**竜楽** ああ、そうですね。その前はずっと観戦ですか。

**田中** 部長でもないのに、好きだから夏休みとか、授業のないときにいったり、せっせと通った。だから、先ほども言ったように、日ごろからできるだけ見る。ただ「がんばれ」と言うだけでなく、もっとも僕自身練習しているシーンが好きなんですよ。一生懸命練習しているのはやはりいいですよ。

**竜楽** 練習を見て試合を見ると、試合だけ見にくる人とは楽しみ方が全然違うでしょうね。

**田中** そうかもしれないですね。やはり練習は懸命に努力するところですから、いろいろ見えてきますね。また、ぼくは練習を一生懸命している選手が好きですから。自分がやらなくても、自分がやっているような気持ちになって、どうしようかといういろいろ考えたりするんです。新聞でもいちばん見るのはスコアのところ

で、あれを見ると、ここで盛り上がりてきたんだな、ここで得点してワッと湧いたんだなと想像します。そういうのがすごく好きなんです。

**竜楽** あとでスコアブックを見ると、試合の流れが非常によく分かる。

**田中** その時も興奮しますが、夜、テレビを見たうえで翌日新聞のスコアブックを見て、チャンスとかピンチというのを想像します。この人がここでチャンスをつくったんだな、球場が盛り上がりてきたんだな。ここで打って還した。ここでワッと湧いたんだ。そのイメージーションが楽しいんです。

**竜楽** 確かに楽しめますね。

**田中** いい落語もそうですね。

## 落語のスコアブック

**竜楽** 落語界にもスコアブックに当たるものがあります。寄席では演目を載せたプログラムはなく、演者は

客の雰囲気を見て何をやるかその場で決めます。言ってみれば筋書きのないドラマなんです。その演目ネタバレ帳という帳面に順に書いていきます。後の演者はネタバレを見て、今まで出た話と違う傾向のものを選びます。また、後日ネタ帳を見れば、その日はどんなお客さまかというのがわかるんです。このへんで苦労しているとか、この人のところで受けたから、次の人は軽い嘶で下りたんだとか、あとで見ても結構おもしろい。これがスコアブックみたいなものでしょうね。こいつがここで点取ったな。こいつは受けなくて早く下りたとか……。先生がカッパ・ブックスを出さずきつかけも、この辺りがきつかけではないですか。

田中 実は二年間、ぼくラジオで生放送をやっていたんです。それをやるきつかけは……。ぼくが、野球に興味持っているなんてだれも思わなくて、1人で楽しんでいただけ

が、あるとき日経の新聞記者と一緒に飲んでいて、ついつい野球で盛り上がったんです。それで、日経新聞のいちばん後ろのページに阪神の話を書けというので、隠れ阪神ファンという感じで書いた。そうしたらFM東京の人がそれを読んだらしくて「ぼくのところに来て話してくれ」ということになったんです。そこで当時、北別府が沢村賞（昭和58年）をもらったのをテーマに「沢村賞の条件」を調べたんです。沢村賞の条件は、攻める側から見ると一塁ベースへの遠さではないか。つまり、あるピッチャーが出てくると、なかなか一塁に行けない、みんなの出塁のチャンスがごく少ない。ピッチャーからこれをピンチ率というんですが、一塁ベースに平均してなかなか届かない率を考えたんです。

それを計算すると、北別府が1人の打者を平均で一塁ベース過ぎ2メートル28センチまで進ませてしま

うのに対して、江川は一塁ベースの手前2メートル99センチでして、江川の方がすごいです。だから、沢村賞の条件に当てはまるのは江川でしょう。野球の楽しみ方の一つとして、こんなかたちでいろいろと統計を調べてみると、自分なりに新しい発見がありますよと言ったんです。

江川で言えば、おもしろい話が二つあるんです。一つは、「ピッチャーのお肩の曲がり角」。選手の過去をずっと調べてみると、金田だけは別格で全然当てはまらないんですが、ほかの人はみんな当てはまる。「ジャイアンツファンの人はいやでしょうが、江川もそろそろお肩の曲がり角です」と朝放送したら、昼間に札幌でゲームがあつて、江川が初めて2回ちょっとぐらいでノックアウトされた。ぼくが変なことを言うからだとジャイアンツファンにだいぶ叱られちゃった。

竜楽 プロ入りしてからの投球イニ

ング数の問題ですね。

田中 そうなんです。インング数を合わせると、限界とは言わなくても、どうしても曲がり角が来てしまふ。

そのことを言いたかったんです。もう一つ、江川とトレードされた小林というピッチャーが突然やめたのを覚えていると思います。江川の場合も基本的にそうでしたが、みんなが見ると、まだすばらしいピッチャーなのに、なぜやるのか理解できない。ぼくはそれはエースのプライドだと言ったんです。ランナーを出さかどうか、それだけを見ると、前と同じように、いいピッチングしている。だから、ふつうの人は、「なぜ投げられるのにやめるの？」となる。ところが、ピンチになったときに抑えられるかどうか。ピンチに勝負して勝つかどうか。それを調べてみると極端に悪くなっている。こういうときに通用しなくなってきた。負け出した。それが出てくると危ないです

よ。小林がそうで、みんなまだ投げられると言うけれども、小林にとつて、内面では自分がエースで絶対にやれるというプライドが傷ついている。そうすると、おれはもうここを立ち去ったほうが良いという決心をする。ヤクルトのエース松岡というピッチャーは「少し気が出ていますから、引退しないでがんばってください」と書いたらその2年後ぐらいにやめてしまった。

**竜楽** 200勝できなかったでものね。

**田中** できなかった。それから江川も最後、小早川に打たれた。エースだから辞めたんです。また、若いピッチャーで、エースクラスに上がるかどうかの境目も、自信だと思えます。いい成績で相手を抑えていても、このようにときにがたがた崩れるのはまだ自信がないからでしょうね。若いピッチャーで、いざというときに抑えられる。その成績が上がってき



たら、とたんにエースクラスに上がる。やはり自信があるかどうかです。

**竜楽** 若い人がエースになるかならないかというのは、やはり精神的なものもあるんですね。

**田中** 大きいそうですね。だからブルペンエースつてあるんです。練習で投げるときはものすごくいい。それから、ふつうにやると結構やっていても、結局このことになったり弱くなる。

**田中** ぼくがラジオに出たときも、いろいろな話をどんどんして欲しいと言われました。ぼくも緊張するタイプだから、初めは緊張してつら

かったんですが、そのうちに慣れてきて、いろいろ言い出したらおもしろくなってきました。落語でもそうでしょうが、人に伝える喜びというんですか、いちばん好きなことで

しゃべれば最高ですね、自信もできるし（笑い）。人間、ものごと好きでないためですね。嘶家さんを見ていると、本当に自分が好きで、おもしろくて、つられていく。

**竜楽** やはり好きでないとやれませぬね。ただ好きな嘶ばかりやっていると、それが成長を妨げるといっても結構あるんです。

**田中** そうですか。

**竜楽** 嫌いな話のほうが勉強になったり、この話やりたくないなど思ってた嘶が、あとになると得意ネタになることのほうが、わりと多いみたいですね。好きな嘶は、恋愛ではあ

りませんが、自分だけが熱くなって冷静に演じられない。いい気持ちになつてしゃべっているけれども、聞き手はさほどでもないということはよくあります。

**田中** なるほどね。話がそれちゃいました。が、あとは「プロ野球ニュース」に出てどうやったら野球をおもしろくするかを話したりしたのがきっかけで、結局、本を出すことになつてしまったんです。もともと本を書くという気持ちは無かったんですが。

**竜楽** あの本を拝見したら、いまの状況が非常によくわかりますね。また本をお出しになったらいいのにと、思うんです。

**田中** うれしいことに、昨年の正月かな、「次の本、まだですか」って、全然知らない人からメールがありました。

**竜楽** あの本は、そのまま今の野球の状況に当てはめて、もう一度同じ

内容で書いても通用すると思いますよ。

田中 ありがとうございます。そうですね、当時は大リーグもだいぶ勉強したんですが、基本的には同じでしたね。確か中大の出身の方で、大

リーグの球団で仕事をしている人がいるんです。その人の話では、日本との違いはやはり選手のパワーが全然違うそうです。向こうでホームラン10本程度しか打てない人が、日本

に来ると40本打つでしょう。  
竜楽 本当ですね。

田中 ぼくはクロマティをものすごく評価していたんです。あの人はやはりタイムリー率が結構いいんです。それから、西武にいたテリーってご存じないですか。

竜楽 知っています。

田中 あの人も長嶋のようにチャンスに走者を選ずタイムリー率がものすごく高い。日本シリーズで巨人と西武でやって3勝3敗で、最後、4

対3で西武が勝ちました。

竜楽 7戦までもつれたゲームですね。

田中 そうです。

竜楽 最後、東尾が投げた。

田中 そうでしたっけ。

竜楽 ええ、巨人の方は中畑が活躍して……。

田中 そうそう、中畑が打った。あのときに、ぼく、ラジオで予想を出していたんですよ。計算したら「ぎりぎり難しい。でもほんのちよつとの差で西武じゃないでしょうか」

と。テリーが長嶋みたいにチャンス率が高いから、このいうときにやる。だから、最後のところでそういう人がいるかどうかで決まると。この選手が一番、この選手が二番と決めて計算していました。それを合わせてみると、チャンスのほうはよく似ているけれども、テリーの走者を選ず率のところで西武となったんです。長嶋があどきにジャイアンツ

で打っていたら、ジャイアンツだったと思うんですが……（笑い）。  
竜楽 そのデータが逆に、裏切られることはないですか。  
田中 もちろん、ぼくのはトータルした話ですから、毎回やればいくらでもあります。でも、プロ野球は繰り返しスポーツです。年間百数十試合もやっているの、結局のところは、繰り返しが少しずつ積み重なって、その差で決まってくるよ。  
竜楽 先生がやられたのは、いままでデータ野球と言われたデータにはないものですよ。  
田中 もちろん、そうです。ちよつと違います。  
竜楽 ある人がバッターボックスに立った場合、その人がバッターボックスに1回立つと、平均してこの人はどのぐらいまで進んでいるかというような

ことを計算するんですね。その人が打って塁に出て、走る場合もあるわけですよ。そうしたら、そこは二塁まで到達している。その平均を先生は全部出しているわけですね。

## 進化するイチロー

田中 よけいなことですが、ぼくは野球の新しい見方というかたちで、選手を評価しています。だから、イチローが行ってアメリカ大リーグが変わったというのは、大変嬉しいんです。アメリカ大リーグはポンとホームランを打つだけで楽しんでい



たけれども、実はこんな野球がありますよ。でも、それはタイカップの野球なんです。

**竜楽** たった一人の人間がその時代まで戻したというか、よみがえらせたんですね。

**田中** そういう選手が評価されだした。今年になると、イチローはまた進化しています。去年は打つけれども、初めから打っていたからフオアボールが少なかった。今年はフオアボールも多くて、すぐ選んでいるでしょう。それから、状況によってはバントも多いし、慣れてきたんでしょ。ね。選択肢が広がったという感じです。

**竜楽** 出塁にかなりこだわっているみたいですね。

**田中** イチローみたいなのが一塁に出ると、ピッチャーは気になってしまつて、結局はバッターを攻めるのに速い球、ストレートばかりになつてしまふんです。だから、チーム全

体に与える影響はすごく大きくなります。

**竜楽** 向こうでただ出塁することについて、安心して出塁を選べるだけの査定がしっかりしているということもあるんですか。

**田中** ぼくは年俸を計算したりするのに粗っぽく、一つの目安として出したんですが、実際はものすごく細かく、百八十何ポイントもあるそうです。毎試合を細かく全部やっているんですって。

**竜楽** 大リーグですか。

**田中** いやいや、それが日本なんです。それをもとに査定する。でも実際、みんな細かくやったけれども、トータルで見ると、この成績の人は年俸がここまでという一つの傾向があるのではないか。方程式を持ち出して、そこに代入すれば、この人の年俸はだいたいこのぐらいになりますというのが当てはまるのではないかと思います。

**竜楽** 日本の年俸と大リーグの年俸はあのころより開いていますか。

**田中** 向こうのほうがはるかに高いですね。

**竜楽** 落合のところよりもいまのほうが開いているようですね。

**田中** はいそうです。これはグローバル化で、大リーグが世界中にテレビ中継されるので収入が多くなつたんでしょうね。いまはアメリカンスタンダードということで、アメリカが世界の中心になるとそこで活躍する選手の収入がものすごく大きくなりますね。だから、松井が行きたいのはよくわかるし、ぼくも、行ったほうがおもしろいかなという気がします。松井がいいのは、打率が高いでしょう。ぼくは、あの人をそういう意味ですごく評価しているんです。

向こうに行くとホームランというよりも、むしろイチロー的な要素で高く評価しますから。ああいうタイプは通用すると思います。中村のよう

にポイントとホームランを打つだけじゃ。三冠王を取れる可能性もあるんです。

**竜楽** そうですね。トータルでいったら取っていますものね。

**田中** 向こうで日本人選手に期待するのはそういうところではないですか。結構チャンスもつくっていきけるし。**竜楽** 松井も三冠王を取ってから行きたいと思つていてのではないですか。

**田中** そうかも知れませんが……。

**竜楽** 野球とベースボールの違いについてよく話に出ますが、先生のように見るのが一番日本的で、アメリカ人全般はあまり難しく考えずに、投げて打つて走るといふ単純明快さを重視しているのでしょうか。

**田中** そういうところがありますね。しかもアメリカ人は成功ものが好きだから、サッカーのように、なかなか点が入らないでフラストレーションが溜まるものはだめなんです

よ。耐えて耐えて、最後に報われた

ときの大きな喜びを味わうという意味では、サッカーは日本のメンタリティーに合うのかも知れない。ただ、あまりにもフラストレーションが大きいから、もう少しゴールポストの枠を大きくしたらどうかと思うことも（笑い）。

竜楽 日本人は考えるのがすごく好きだと思っんです、データにしても何にしても。

田中 そうですね。

竜楽 スポーツ新聞を見ると、毎日全員のデータが載っているじゃないですか。あれを大リーグの人が「クレージーだ」と言ってたという話あります。

田中 ただ、アメリカ人もデータは好きですよ。アメフトを見てもそうですが、この場合はこうだとか、いろいろなデータに基づくケースを考え、それを工夫して使っています。問題はたくさんデータをどう自分

流に料理して使うかです。

竜楽 生かし方ですね。

田中 学生にもしょっちゅう言うんですが、世の中、情報だらけで情報に振り回されるから、自分がどういう切り口で見るかが大切だと。先程江川が沢村賞という話をしたとき「自分流にこういう基準で見るとこうだ」ということを考えるほうがおもしろい、自分の切り口、これが大切で、その切り口から言うと、沢村賞は江川になるんだという話です。

同じようなことを自分の切り口でいろいろ計算してみると、一般に言われているのとはだいぶ違うところがたくさん出てくるんです。

竜楽 いま、情報は本当に山ほどありますね。

## 野球も落語も「間」が大切

田中 あるんですよ。ところで師匠は古典をやっているらしいですが、

ぼくは、我流で何かやるのをあまり好きではなくて、繰り返しの中のセオリーというのかな。みんなそこに

乗ると気持ちよくなるような……。やはりこれが一番居心地がいいという何かがあるんですよ。

竜楽 そうですね。体のリズムに合ったように、ここでは寝ててもいいとか、寝させてくれる。でもヤマ場になるとちゃんと目が覚めて、ワツとなるように……。

田中 そうなんですすよね。ストーリーを知っていてもおもしろいんですよ。

竜楽 落語もそうです。技術的に言うと、だれ場をいかにだれさせるかというか、本当にだれてはいけないんですけど、聞かせすぎてもいけない。ある程度だれさせておくことによつてヤマ場が生きる。下手な人は全力で全部やる。そうすると、聞いている人が最後にくたびれてしまう。日

本人には、この「間」という文化が

必要ですよですね。

田中 野球もプロセスがいいと本当に楽しいですね。サッカーと違って、野球は休めるところがあるから、それでまた盛り上がりつついく。そのへんの間合いが、野球から離れられないという感じですよ。

※対談を終えてひと言※

スポーツ好きの私にとつては願ってもない対談で時のたつのを忘れてしまいました。

野球と落語の共通点を考えてみたらけっこうありますね。野球では裏に出たランナーはひとつでも先のベースをねらいます。落語家は高座に出たらひとつでも余計に座ぶとんをねらうんですね。ピッチャーはカハボールをストーンと落としてアウトをとりにゆく。我々はカハ斬をトントンと落として笑いとるといふ……なにに、このあいだ聴いたおまえの斬はまるで落ちてなかった？ うーんあれはタマにキズです。